

『誰もが住みやすい町 木更津』を目指して ～国際パラリンピック委員会公認教材「I'mPOSSIBLE」で共生社会を考える～

木更津市立清見台小学校

1 はじめに

全校児童544名の中規模である本校が「オリンピック・パラリンピック教育推進校」に指定されて3年が経つ。オリンピック・パラリンピックの機運醸成を目標に、『本物に触れ、自ら考える』を意識して取り組んだ。本稿では、その中でも効果が感じられた内容を中心に紹介する。

2 パラリンピックと多様性

子供たちを取り巻く社会は、急速に変化してきている。その大きな変化の中、社会の担い手となる子供たちに何を身に付けさせていくか考えたとき、「多様性」がポイントになると感じていた。

これをどう学校教育の中で指導していけばいいかと悩んでいたときに、パラリンピック教育に関する研修会に参加した。研修会でパラリンピックの様子を映像で見ると、視覚障がい者であるパラアスリートがサッカーをし、両腕を欠損した人が卓球やアーチェリーをする姿を見て感銘を受けた。と同時に『パラリンピック教育』に、子供たちに伝えたい『多様性』を結び付けるヒントがあるような気がした。そこで、全国の学校に配付されていた国際パラリンピック委員会公認教材「I'mPOSSIBLE」を使ってみようと考えた。

3 取組の実践

(1)「知識」ではなく「意識」を変える

「I'mPOSSIBLE」はパラリンピックそのもの

の知識（歴史や意義、競技について）を高めるだけではなく、子供たちが持つ「障がい」という言葉に対するネガティブなイメージをなくし、見方や考え方など、意識を変える教材である。子供たちにとって、パラリンピックという興味・関心が高い話題を取り上げているため、子供の意欲が高い状態で学習に取り組むことができた。

(2)興味・関心のあるところから始める

ユニットごとに定めているねらいを確認し、教師自身が子供たちに「どこのユニットで、何を考えさせたいのか」をしっかりとイメージを持っておくことが必要である。「共生社会の構築」を最終目標に設定すれば、その指導法の自由度が高い。子供の興味・関心に合わせてユニットを実施することが大事だと考える。

(3)「障がい」を身近に考える工夫

児童の実態を調査すると、実際に車いすの方や、視覚障がいの方などと接したことのない児童がほとんどであった。多様性（障がいのある方）を「受容」する状態になかったといえる。「(もし学校に)パラリンピアンが来るとしたら」というユニットでは、車いすの方が学校に来ると仮定したとき、どのような問題点があり、いかに対応すればよいか、校内のバリアフリーを考える場面がある。そのユニット終了後に、実際にパラリンピアンにゲストとして登場していただき、座学で考えた対処方法を実践するという流れで学習を進めた。それまで接したことがない車いすの方、

しかもパラリンピアンの方が目の前に現れ、驚きを隠せない様子だったが、3階にある教室に行くまでの問題点をみんなで実地体験し、あるものを工夫してできるようにならないかなど、必死になって子供たちは考えた。車いすの方が日常生活の中で、どこで困難や不便を感じ、どう補助をすれば良いかなど、「相手の立場に立って考える大切さ」を感じることができた。ここで初めてパラリンピアンというアスリートも日常生活で不便に思う場面があるのだと感じた。



(4)「共生社会を本気で考える」

「車いすの方を家に招くとしたら」と考えさせ、自分の家のバリアフリーについても考えさせた。また、さらに視野や思考が広がるように自分たちの地域について「誰もが住みやすい町 木更津」を実現させるには、どんな取組が必要か、と投げかけた。「みんなの意見を市長にとどけよう」と設定したことで真剣に話し合いが進んだ。これまでの経験や学習したこと、知っている知識の中で子供たちは必死に考えた。グループで話し合い、アウトプットさせると、ハード面（建築物や施設など）に手を加えるという意見と同時に、周りの人のハート面（理解や協力など）に手を加える必要があるなど、子供ならではの発想で、大人が思いつかないような意見が数多く提案された。授業を見ていた大人たちからは驚きの声が上がった。まさに『共生社会の構

築のための基盤となる考え』が子供たちの中に出来つつあるのを感じることができた。



(5)積極的な発信

授業参観やオープンスクールの機会を使って、積極的に「I'mPOSSIBLE」の学習を複数学年、学級で実施し、子供のみならず、保護者や地域の方が興味・関心をもってもらえるように努力をした。また、市の教員研修などでも、実践を発表し、市内の教員にも興味をもってもらい、実践する学校を増やした。

4 まとめ

「I'mPOSSIBLE」を使ったパラリンピック教育を行ってみて、冒頭にも書いたように、多様性を学ばせるには素晴らしい教材だと思う。「パラリンピックを学ぶ」のではなく、「パラリンピックで学ぶ」という感覚のほうが近いといえる。「多様性」だけでなく、子供たちの関心や興味は多岐に広がっていく。自ら考えるプロセスがたくさんあり、主体的・対話的で深い学びが実現可能となる。また、「障がい」という言葉が持つネガティブなイメージを払拭するのは、「パラリンピック」という題材を使って、学習する方がよいと感じた。この教材を進めていくと、子供たちの柔軟な考えや発想に触れ、指導する教師自身が「障がい」への考えが変化していくのがわかる。このように学習した子供たちこそが、共生社会の構築のための中心的な担い手となっていくのだろうと信じている。